明治維新

宮田弥三郎

検印
廃止

昭和34年2月25日　第1刷発行

はだか源氏（げんじ）
（教養）

著者　池田弥三郎（いけだ やさぶろう）
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
振替東京3930
電話大塚（94）3101.3111.3121

¥ 160

© 池田弥三郎 一九五九

（落丁本・乱丁本はおとりかえいたします）　（黒柳製本）

源氏物語

澤田弥三郎

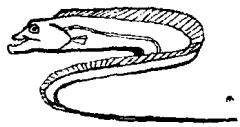
池田弥三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

装幀・題字　飯島春敬
カット　難波淳郎

ただなれよ

——序にかえて——



源氏物語については、註釈や評論批評、研究のほかに、いろいろな逸話というべきものが数多く伝わっている。そういう逸話の整理はあまり今まで行なわれていないのだが、実は源氏物語の読者の歴史を知る上には、なかなか貴重な暗示に富んでいる。その中で、特に印象的な話の一つに、三度、源氏をもって答えたという話がある。話のぬしは、後奈良天皇の御代に、関白にまでのぼった九条稙通（くじょうたねみち。一五〇七—一五九四）である。

ある時、連歌師の里村紹巴（さとむらしょうは。一五二四—一六〇二）が稙通を訪れた時に、紹巴が稙通に「今、何をお読みになっていますか」と聞いた。稙通は「源氏」と答えた。そこで次に紹巴が「最近にお読みになった珍らしい歌書にはどんなものがございましたか」と聞いた。そうしたら稙通は又「源氏」と答えた。今度は紹巴が話題をかえて「あなたのこの静かなおくらしを、誰がやって来ておなぐさめしておりますか」と聞いた。そうしたら稙通は、三度

「源氏」と答えた、というのである。

この話は松永貞徳（一五七一―一六五三）の「戴恩記」という書物に書いてあるのだが、伴蒿蹊（ばんこうけい。一七三三―一八〇六）の「閑田次筆」という本にひいてある話は、同じ「戴恩記」からだが少し違って、質問が「何ぞおもしろきものは」「めずらしきものはいかに」という二問になっている。ともかく、いろいろな伝説めいた話があったのだろうが、この碩通という人は、源氏は「六十余年、見れどもあかず」と言っていて、源氏を好むこと、飢えたる人が食を見るごとくだったと伝えられている。「孟津抄」という、価値の高い註釈書を書きのこした人である。

しかし、これほどまでに執着した読者のいた反面、とても読み通せなかった読者も、昔だって多かったのである。始めから読み出して、どうやら須磨の巻ぐらいまで読んで、くたびれてやめてしまう読者もいたわけだ。そしてそういう読者をからかって「須磨源氏」という語が出来、これが流布した。しかし第十二巻目の須磨の巻まで読めば、まだいい方で、中には「桐壺源氏」というべき読者も多いのである。第一巻で、ごめんをこうむってしまう読者である。

源氏は何と言っても長い。この長さのために、読み通す読者が得にくくて、不当な扱いをうけてきた、といっていい。五十四帖という長さが、まずもって読者にため息をつかせてしまう。源氏の長さを、手取り早く言ってみると、岩波文庫本で、ほしの数が全部で十一である。これはドストエフスキーの「罪と罰」の七つ、「悪霊」の十よりも長く、「カラマゾフの兄弟」

の十五より短い。トルストイの「戦争と平和」が二十二だから、ちょうどその半分ということになる。しかし口語訳の、たとえば谷崎源氏だったら、十一のほしの数にはおさまらないだろう。だから、相当な長さであることがわかるであろう。

しかもその長さに加えて、読者をへこたれさせるに十分な難解で息の長い文章であり、主要人物がほとんど固有名詞では出て来ないという読みにくさがある。三度、源氏をもって答えるというくらい、たしかに汲めどもつきぬ興味をこんこんと覚えさせはするが、そこへ行くまでの障害が、厳然としているのである。

そしてそれは何も現代のわれわれ読者にかぎることではなかった。木下長嘯子（きのしたちょうしょうし。豊臣秀吉の義甥という。一五七〇―一六五〇）の話として伝えられていることだが、ある人が長嘯子に向って、世間でしきりにもてはやしている源氏物語を読んでみたが、まるでこんがらかった糸の、どこが始めなのか探し出せないような具合で、一向にわからない、どうしたもんだろうと質問した。これに対して、長嘯子はズバリと一言、

ただなれよ。

と言っている。けだし名言であろう。

ただ「なれ」なさい。先へ先へと読んで行けば、いつまでも、こんがらかっていてわからないということはなくなる。たとえて言えば、真夏のころに、烈しい日ざしの中を歩いて来て、急に家の中にはいった当座のようなもので、始めの中は闇の中にはいったみたい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

で、ものの色目も区別もたたないが、しばらくする中に、自然に、あれはあれ、これはこれと、調度類がはっきり見えて来る。源氏もそんなものだ。

と言うのである。

さて――、源氏物語は、ある時期、ある人々によって、もっぱら「誨淫の書」、すなわちいんびなことを教える書物だと見られて来た。この方の読者の伝統は長く、一代の碩学、故山田孝雄博士も「源氏物語は余が道義心よりして是認しがたし」と公言した。まして近世の川柳子になると、そうした世間流通の知識の上に立ってものを言うのだから、

石山で、出来た草子のやわらかさ

ということになる。そうした世間流通の知識どおりに、源氏物語がはたして誨淫の書であるかどうか、はだかにしてみようと思う。家の中の光線に目がなれて来ると、そこに案外な源氏の姿が見えて来るかも知れない。

目次

序　ただなれよ

一　なる程、世間はむずかしい……三
際にはあらぬが——谷崎源氏改定版——前渡り——はなし——源氏全講会——いとかたかるべき世にこそあめれ

二　いかまほしきは……三六
横さまの死——辞世の歌——だじゃれの歌——歌の批評——いく——いざなぎ・いざなみ

三　添いぶし……三一
光源氏の後援者——左右大臣家の対立——弘徽殿の悪后——元服——添いぶしの女——女性の年くらべ——よづかぬ添いぶし

四　床さり……三六
女の盛り——床はなれ——有常の場合——姉の先立ちて——女はらから——額田王——いわなが姫——允恭の皇后——嫉妬のルール

五　出来た草子のやわらかさ……四三
書き初め——石山伝説——世間の常識——六十帖——やわらかさ

六　かた違え……四六
帚木と空蟬——方ふたがり——方違え——天一神——すさまじきもの

七　のぞき……四九
女の顔——源氏の行動——立ち聞き——小君の存在——伊予の湯げた——伊予の留守

八　母と子と犯せる罪……五三
空蟬軒端荻は母娘である——源氏のよろめき——国つ罪——おやこたわけ——けものたわけ——小話四——横の並び

九　母にも私にも夫……五七
近親の結婚——母にも兄・妾にも兄——おじさんと呼び合う仲——西鶴の絵解き——弁慶の絵解き

一〇　よばい……六二
源氏物語の行動描写——夕顔とのなれそめ——ある座談会にて——光源氏の空蟬への直接行動——いたずら臥し——中将ちがい

一一　かたらい……六七
光源氏侵入の図——口上手——空蟬の決意——見し夢を——相合うことの難き——空蟬の歌

一二　かいまみ……七一
夕顔の巻——預かりのかいまみ——恋の発端——うるさき心——夕顔の歌——伊勢物語第一段——かいまみという結婚形式

一三　覆面の恋人……七七
わたくしの懸想——本意にはあらぬ恋——常夏の女——あまの子——いずれか狐——紐とく花——急死
一四　噂をすれば……八一
建物の怪——御息所の生霊——変化の呼び出し——噂をすれば——紫の上発病——鶴亀の風流——闖入者
一五　あと始末……八五
鬼をよび出す——夢に見る——鬼一口——鬼のあくび——秘密の保持——玉鬘の漂流
一六　紐とく花……八九
下紐とくな——二人して結びし紐——香取処女のひも——下紐結う手——下紐とけぬ——光源氏のひもの歌
一七　ながめ……九四
夕顔の死後——右近との物語——ながめの文学——あえかな女——伊勢のながめ——後朝の歌
一八　夜離れ……九八
後朝の文をやらず——気にいらぬ女——よがれ——めかれ——蛙のめかれ時——嫉妬の民謡——なとりれそ——鉄幹の歌
一九　寝は見ねど……一〇三
十八歳の源氏——心安き所——二重の掠奪——くり返しの人生——光源氏の強引さ——後の親——根は見ず——おもちゃ

二〇　すき見二景……一〇七
北山の庵室——四十女の美——生い先見ゆ——かの人の代り——薫ののぞき——あらわなり——昔人の代り
二一　螢の光窓の雪……一一
雪あかり——螢の光り——夕霧と紫の上——野分の日——春の曙の樺桜——死に顔——いにしえと今と
二二　女は男の顔を見る……一一五
宣長の採集——男を月旦する——行列の男——玉鬘の男性品評——柑子をぶつける女——うろつく男
二三　ひる寝・うたた寝……一二〇
小町の歌——狛野の物語——雲井の雁のひる寝——女房三人——紫式部——日記の昼寝——うたてあり
二四　はなの女……一二四
なににこの——見ぬ恋——なまいとおし——三頭身の馬づら——てんの皮衣——失敗談
二五　人のつらさに老いを知る……一二六
尾籠物語——老女との恋——源典侍——橋柱——長柄の橋——老いの恋の歌
二六　つくも髪……一三三
好き心のない人——父がみとめる——おばおとどの恋——業平の場合——思うをも思わぬをも——つくもがみ——光源氏と頭の中将

二七　いどみ心……一三六
頭の中将と源典侍——かたらいつく——東屋の歌——我や人妻——ぬれるという語——対立する人物——この御仲どものいどみ

二八　扇をとられて……一四〇
運命の女——おぼろづくよに似るものぞなき——扇をとられて——兄の妻——はやぶさわけ——おおうすの尊——井上内親王の若き相手——女たらし

二九　ところ争い……一四五
葵の上と御息所——よめがね——色ごとの庭訓——車のところ争い——光源氏の思い出話——生霊

三〇　皇太子の未亡人……一四九
御息所の決心——心ときめき——逆推する経歴——御息所の問題

三一　源氏名……一五三
薄雲太夫——遊女の名——小倉百人一首名——こそ名——はしたの名——源氏表白——源氏文字ぐさり——物語の人物の名

三二　新手枕……一五七
紫の上誕生——女君起きぬ朝——子の子の餅——あだ問答——惟光という人物——新手枕

三三　紫のゆかり……一六一
紫の歌——武蔵野の心——紫の根にかよう——心づくしの人——叔母と姪——若紫の名

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook